
優しい世界の救い方（テスト作）

思い立ったが吉日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい世界の救い方（テスト作）

【Nコード】

N4847BA

【作者名】

思い立ったが吉日

【あらすじ】

異世界に召喚された主人公。文句を言ったところで召喚されたものは仕方ないと思い、話をしようと試みるが…どうも様子がおかしい。あれ？俺のことが見えてない？俺、あつたらいいなどうすりゃいいのさ…ほのぼのとした雰囲気、笑いあり涙と^{あつたらいいな}いった作品にしていきます。テンプレなんですけど、今までにない内容にしていけるよう頑張ります。

異世界物を書いてみたくて脳内にしかないプロットに従ってみまし

た。最強物だけど、最強「使い勝手がいいわけじゃない。でもいつか…なつもりで書いてみます。

週一回の更新を目標に頑張ります。

<http://mypage.syosetu.com/178017/>

の取扱説明書をよんでいたただければ幸いです。

1 戦場へ（前書き）

初めての投稿になります。

が、しかし、テスト作品でもあります。

脳内の妄想を文章としてアウトプットしきれず意味不明な部分も多々出てくると思います。

できるだけ、わからない人に対してわかるように伝えるよう努力をしています。

その努力が反映しきれていなかったり、誤字などをご指摘いただけたら幸いです。

週一回を目標に更新したいと思います。

導入部分を改稿致しました。

1 戦場へ

ある晴れた日の昼下がり、ワイマールという街の賑やかな大通りに面した一軒の家の前に男が辿り着いた。

正しくは、男が一人と男の頭の上ののつかった一匹の小さな竜だ。

「…ここで合ってるよな？」

真つ白なコートを羽織った男が緊張と期待とが半々に混ざった表情（例えるなら、オラ、ワクワクしてきたぞ！）で恐る恐る呟いた。

『ここで間違いないはずだよ。ほら、教えてもらった特徴も合ってるしー。』

男とは違い飄々と間延びした雰囲気では返答したのは、男の頭の上に乗った真つ白な竜だ。

男は黄色の強い金色の目。髪の毛はチョコレートブラウンで前髪は眉毛がかろうじて見える程度の長さ。

顔は灰色のマフラーで口元が隠れていてわかりにくいだが、整ってはいるがあまり印象に残らないような凡庸な顔つき。

茶色のスラっとした長ズボンに黒をベースに銀の金属っぽいプレートで覆われた膝下までの長さのブーツを履き、灰色のグローブをつけ、膝丈の真つ白で丈夫そうなフード付きロングコートを羽織っていた。

肌は男としては色白。身長は170台半ばほど。体格は痩せてはい

ないが、周囲を歩く人と比べるとどうしても細くみえるほどだ。

一方竜のほうはオーソドックスな西洋竜を細くしたスタイルで、目は男と同じ黄色の強い金色。鳥のような一対の翼と、同じく鳥のように真っ白な羽毛が全身をびっしりと覆っている。

サイズは体が男の頭の上ののっかる程度のサイズだが、男の後頭部あたりから垂れ下がった尻尾は男の腰まであるほどにやたらと長いのが印象的か。

家の前で足を止めている男は、ゴクリと生唾を飲み込む。

表情は「やっと着いたのか」と物語っていた。

その瞬間気合を入れなおし、颯爽と動き出す。

「よし、行こうか！」

そう言うと足早に進み、慎重に入口を潜り抜ける。

中に入りすぐさま周囲を警戒。

周囲には既に数人の姿が見えた。

こちらを気にもしない数組の男女は武器を脇に置いて談笑しリラックスした表情をしているのが伺える。

そんな周囲を男と竜も無視し、奥へと突き進む。

そしてこれからの戦いに備え己の実力を遺憾なく発揮できる位置にすぐさま移動し、グローブを外し準備する。

目の前にはここに置かれていた一冊の冊子。そこにはそれぞれ文字が羅列してあった。

竜は男の頭上から声を投げかける。

『…どうするー？』

男はニヤリと口の端を持ち上げながら意味ありげに答える。

「そうだな…作戦通りでいいんじゃないか？」

『それもそうだねー。』
と言いながら竜は、空を飛び男の対面に座する。

それを見て準備が整ったと判断した男は、とても自然な動きで右手を上に掲げすぐさま叫んだ

「すみませーん！おねえさーん！？注文いいですかー？」

すると見た目18歳ぐらいの元気な女性がお冷を二つ持ち対応してくれた。

「はーいつ！お待たせしましたっ！ご注文は何に致しますか？」

「えーつとね、最初はじめから最後こゝろまでの料理全部を二人前ずつで！」

その瞬間、今まで形成していた和やかな食堂の雰囲気は凍った。それでも注文をとりに来た女性はプロなのだろう。

いち早く再起動を果たし、声を返す。

「え…あの…全部？二人前？…ですか？」

誰が聞いても私困惑してます！といった声を出した女性の問いかけ
<ホントに全部を二人前？> に対して男は自然体のままに、これからでてくるであろう料理に期待で胸がいつぱいだからか、女性の問いかけを

(あゝ料理を出すタイミングに悩んでるのかな？)と、斜め上に解釈した男は

「うん、そう！できたものから順番に持ってきてくれたらそれでいいからねー！あ、あと、温かいお茶も二つお願いね！」

と、料理人と女性に対してしっかりと対応(?)してみせた。

数分後、なんとか正常稼働し始めた女性は出来上がった料理を順番に運び出す。

さらに十数分後、料理を運び終えた女性はくたびれた両手を組み上へ伸ばしストレッチしながら、二人のいる場所を眺める。

冗談で戦場と言ったけど、ホントに戦場だった…

二人は終始無言。

いつの間にか周囲にいる数組の男女の談笑も消え唾然とした表情で二人を見守る、響き渡るのは食器の奏でる音と咀嚼する音のみになっていた。

大通りを歩く人々も異様な雰囲気気づき、一体なんだ？と原因を探ろうとする人で人だかりができていた。

周囲がそんなことになっていても気にしない男は箸・ナイフ・フォーク・スプーンを同時に持ち(どうやって?)、料理を次々と口に運び入れている。

周囲がそんなことになっているとは気づかず竜は翼を動かし、空中を移動しながら首を伸ばし料理を捕獲しながら、器用に長い尻尾をも使い次の獲物も自分の元へ次々と誘導していく。

「『ごちそうさまでした!!』」

満足そうな表情を浮かべる男と竜がそこにいた。

周囲の人々は

()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()
()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()()

と、老若男女問わず心を一つにした。おそらく最初で最後であろうことに誰も気づかないままに…。

二人はそんな周囲の気持ちをよそに

「さて、これからどうする?」

『そうだねー。とりあえずデザートでも食べながら落ち着いて話さない?』

「確かに、それが最善だな。すいませーん!このフルーツ盛り合わせ五人前もらえますかー?」

()()()()()()()()()()()()()()()()()()()
!!()()()()()()()

また周囲の人々の心を一つにし、さらにつっこみがあったことは誰も気づかないままに話は進む。

「でもさ、ギルドで金を稼ぎながら目的地に移動するのが一番じゃないか？」

「それもそうだねえー」

「『…………』」

()()()()()()()()()()()()()()()()()()()
てないよね!?!?!?!()()()()()()()

またまた周囲 (r y

「お待たせしました〜フルーツ盛り合わせですっ!お客さんたちすごいね〜!最初は私びっくりしちゃったけど、っていうか今でもまだびっくりしてるんだけど、食べてるとこみてて気持ちよかったからこれ私とお父さんからのサービスねっ!あ、私リディっていうのよろしくねっ!ハイ、どぞっ!」

「え?いいのか?ありがたい!俺はレオ。こいつは縁^{エニシ}。こっちこそよろしくな!よし、早速いただくかうか!」

「おー!!ありがとー!僕もよろしくー!いったただつきまーす!」

「ウフフツ はい、召し上がれっ!それにしても、エニシちゃんって竜よね?こんなキレイな竜初めて見たわ…っごめんなさい。私はそろそろ仕事に戻るわね!ごゆっくり〜」

とりディはひらひらと手を振りながら仕事に戻っていった。

二人も手と翼を振り返しながら返事をした。

「うん、ありがと!仕事頑張っつてね。」

『ありがとー！それにしてもここのご飯美味しかったねー！僕は満足だよー！！』

「俺もだよ。ギルドでオススメの食堂を紹介してもらって正解だったなー」

と、返しつつ色とりどりのカットされたフルーツを食べながらふと十日前のことを思い返していた。

1 戦場へ（後書き）

戦場へ＝食べることは戦いだ！という意味で…わからないですよね
…ごめんなさい…

あと、リディはmobです。ヒロイン化しないはずですよ。

文章短いでしょうか？

区切り方もおかしいでしょうか？

行間みづらいでしょうか？

初めてだらけで不安がいっぱい…

2 召喚？（前書き）

1 話目の導入部分を少し改稿しました。
読まなくても問題はありません。

2 召喚？

高校三年生の夏休み二日目。

時刻は夜の10時を少しまわった頃。

薄暗い道路を時折街灯で照らされる姿は地元では少しばかり名の通った運送会社の名前が印刷された作業着を着ている。

目はこげ茶色で、髪の毛はチョコレートブラウン。前髪はかるうじて眉毛が見える程度の長さ。

たっぷり汗を吸った髪の毛はべったりと肌に張り付き、帽子の跡がくっきり残っていた。

自転車を立ちこぎしている少年の名前は 川本レオ

目指す先は目の前の築15年のアパート。小高い丘の上せいかいそうにあり、長い坂を上った先にあり海がよく見える場所にある静海荘。

海に面した場所に建てられているが、決して しずみそう と読んではいけないという暗黙のルールがある。

「っだー！ やつと着いたあ…今日は特に疲れたなあ…ただいまー」
アパートの鍵を閉め、チェーンをかける。

汗だくをたっぷり吸った作業着を脱ぎ洗濯かごへ放り込みトランクス一丁のまま冷蔵庫からお茶を取り出しコップにも注がず一気飲みをする。

バイト先の運送会社で廃棄処分されそうになったもらいもののテレ

ビの電源をつけ、携帯を充電器にセットする。

次に窓を開け、夏の日差しで蒸し暑くなってしまう室内を換気する。窓をあけたために、波のリズムのいい音が聞こえてきた。

「んーっ！いい風入ってくるなあー！」

疲れた体にも心地いい風が沁み渡ってくる。

このままぼんやりとしたい気持ちを抑え、着替えを準備しぬるめの温度にしたシャワーをさっさと浴びる。

風呂場から出るとまたトランクスー丁のまま今度は冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注いで飲む。

もちろん手は腰の位置！

「んぐっんぐっんぐっ！つぶはあー！」

あーやつぱ風呂上がり一杯は格別だなあなんてことを思いながら、そのままキッチンへ移動し、ポットに水を入れて、水だし用のお茶パックを投入し冷蔵庫へ入れる。

部屋の電気を消しテレビの見える位置にまで移動しなんとなくぼんやり見ていたら、いつのまにか0時を過ぎようとしていた。

（もうこんな時間か…明日も朝からバイトあるし、そろそろ寝るかあ…）

と、疲れた体にもうちよつとだからと鞭を打ち、テレビを消し布団を敷こうと立ち上がる。

ふと気付くと聞こえてくるはずの波の音が消えていた。

あれ？と思うも、疲れてるから気になんないだけかな？と考えた瞬間目が開けられないほどに眩しく部屋の畳が輝きだした。

「っ！？」

突然すぎる事態に混乱しながらも、まずは逃げないといけないと思っ立った。

ここは2階建ての2階にある1Kの角部屋だ。軽い高所恐怖症（ビルの高い階とかは平気だけど、観覧車とかはダメなタイプ）のため、窓から飛び降りて逃げるのは却下。元々玄関から1択しかないじゃん！と自分につっこみながら手探りでヨタヨタとなんとか玄関の方面へ移動するが…遅かったらしい。これ以上ないくらい眩しいと思っていて輝きが更に増したと感じた瞬間に、ふっと今まで感じていた重力が消えた。

いつの間にか目もあけられないほどの眩しさはなくなった代わりに人の気配とざわめきを感じたため、恐る恐る手をどかし、目を開いてみた。

目に入ってきた光景は、およそ20m四方ほどの石を積んでできた神殿のように感じる見慣れない建物。

それから簡素な赤いローブを着てフードをかぶった初老ぐらいかな？と感じる見た目の男女が5人。

そして、同じく赤いローブではあるが、所々を金色のもので縁どっており、高価そうなネックレスで首元を装飾している二十歳ぐらいかな？と感じるキレイな女性が1人いた。

『ここ、どこだよ…ってか何が？何で？』

と、口に出して困惑し改めて周囲を見ようと視線を反らした瞬間、突然大きな声が響いたので声の方へ再度目を向ける。

「召喚はどうなったのですか？勇者様はどちらにいますのですか？」

どうやらキレイな女性が簡素なローブを着た5人を問いただしている様子だ。

5人はわたわたした様子で言い訳をしているようだが、遠まわしに失敗したことを伝えているようだ。

(勇者? いやいやいや、それよりも俺は? どうなるのさ? なんて放置されてるの?)

レオは6人の男女に放置され続けてだんだんと焦り出していた。

『あの、お取り込み中のところ申し訳ないのですが…』

と、このままでは何もわからないので思い切って声をかけたのだが、一切反応のない6人。

『あの、聞こえてますよね? すみませんが、ここどこですか?』
と、更に声をかけてみても、無視を続ける6人。

そんな6人の態度にしびれを切らしたレオは、一番近くにいた5人のローブ姿のうち一人の側へツカツカと近くに歩み寄ると肩を叩いて声をかけようとした。

『なあ! 聞こえて…?』

しかし、肩を叩こうとした手はそのまま相手の体を素通りしてしまい、ますます意味のわからない事態に焦りの増していくレオは

(落ち着け…落ち着こう…こういうときは焦ったらダメだ。まずは深呼吸だ。)

数度の深呼吸を行い、幾分か冷静さを取り戻したレオは腕を組みながら考えをまとめようと、ふと顔を傾げた時に違和感を感じた。

(あれ? 見えてはいけないものが見えて、見えなきゃいけないものが見えなかった気が…)

違和感の元を再確認しようと視線を下に向けるとそこは…

ぱっおーん! (象の鳴き声を脳内再生してください。)

慌てて手で股間を隠しながら

(な…んで、俺、全裸なんだ? 焦った…あの人らに見られてたら、もうお婿に行けないじゃん…)

あんまり冷静さを取り戻しきれなかったレオは、更に深呼吸を重ねながら現在の状況に至るまでをおおまかに順序だてて思い出してみた。

(バイト終わって、家帰ってきて、それから？テレビつけて、シャワー浴びて、んでテレビ見ながらぼーっとしてたらいつの間にか結構な時間になって寝ようとして…そしたらいきなり眩しくなって…)ここまで思い返して、レオは気づいた。頭の横には閃いた！とばかりに電球が見える。

(はーん。わかったぞ！これは夢だな？たくビビらせやがって…ふう、焦った焦った！)

ファンタジー物の長編小説を読んだことはあっても、ラノベなどを読んだことがなく「テンプレ」というものを知らなかったレオ的
外れな推理が炸裂した。

レオが落ち着きだした頃、6人の男女にも新たな動きがあった。

「……仕方がありません。とりあえず外に出ましょう。あなた方は保護結界を解除してください。それから、次に召喚が可能になる時期を調べて速やかに報告してくださいね？」
そう言い残し6人は外へと出て行った。

(それにしても、おかしいな夢だな。夢でよかったけど、服ぐらい、いや、せめてトランクスぐらい履こうよ、俺…っていうか、なんかゾワゾワする。なんだこれ？)
あくまでも夢なんだ！と軽い現実逃避をしていたとき、周囲が歪みはじめた。

(今度はなんだ？夢から覚めるのか？)

2 召喚？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

おかしな部分、わからない部分あればご指摘下さい。

よかった部分。悪かった部分の感想などいただければ幸いです。

3 契約（前書き）

2 話連続投稿です。

2 召喚？をお読みいただいてない方はそちらからお読みください。

3 契約

歪んだ景色が一変し、目の前には明らかに先ほどとは違う景色が広がっていた。

上を見上げれば雲一つない満天の星空が広がっており、周囲は森のようだ。

視線の先には下のほうにも山のように見える場所があることから、この森は周囲よりも高い場所にあるのだろうと推測ができた。

目をひくのは、白っぽい小高い丘。

高校の体育館ぐらいの大きさだなーと感じながら見ていると、それが動いた。

真っ白な羽毛で覆われた巨体。一対の羽が生えており、胴体よりもかなり長い尻尾がふわふわと揺らめいていた。

そーっと視線を動かしていくと、黄色の強い金色の目がこちらを見ている。

『でつか！うわー…羽毛ってことは鳥？でも嘴ないし、顔は竜っぽいやな？でも…おー！見れば見るほど真っ白でキレイだなー！！触ってみたいなー！それにしても、俺の夢はなんでもありなのか？』
見たことのないキレイ生き物を見て感動したレオは無意識にそう呟いていると

『夢ではないぞ？よう参られた、召喚されてきた異世界の人間よ。
尤も、お主の存在がおかしな状態になっておったので我がお主をここへ移動させてきたのだがな』

『……喋った？』

『喋ってはおかしいか？まだ混乱しているようだな……。改めて言うが、これは夢ではないぞ？わかるか？』

『夢じゃない？え？だって、いきなり眩しくなったら変な神殿みたいなところに出てて……喋っても誰も気づかれずに、触れなかったし……？あれ？』

『ふむ、お主、ちと落ち着こうか？我がわかる範囲で説明するからの。まずは座るとよい。』

真っ白で大きな生き物に諭されるように優しく語りかけられたレオは、言う通り落ち着こうと深呼吸を一つする。

『あーうん、たぶん大丈夫だ。うん。だいじょぶだいじょぶ。あ、裸で失礼します。』

と、やっぱり落ち着いてないのかもしれないレオは、おかしな方向に真摯な態度で目の前の生き物の前に座った。

それを見た生き物はもたげていた首を地面まで下げ、レオの視線に近付けた。

体軀の違いがあるため、気持ち程度にしか変化はなかったが。

『まずはそうだな、我は神獣と呼ばれる存在だ。名はないがな。お主の名は？』

『あ、これはどうもご丁寧に。俺は川本レオと言います。よろしく？』

『なかなか肝の据わった少年だな。今のお主の状態についてだが、魂の一部を肉体に残してこちらに来ておるようだの』

『え……俺死んだの？やばい、明日バイトあるのに……社長にどやされる！あ、死んだならどやされようがないのか……』

『なんとも不思議な心配をする奴じゃな……続けるぞ？お主は死んではおらん。元の肉体は仮死状態となっておるはずじゃ。尤も今すぐ

元に戻るわけではないが…」

ここで慌てふためいたところで目の前の神獣に責任はないのだし、大人しく説明を聞くことにした。

時折気になった部分に質問を投げかけながらも、神獣の説明は続いていき、わかったことは、

召喚魔術 という儀式で召喚されたこと。召喚魔術で召喚できる人間の情報量に限界があるため、肉体に魂の一部を残して幽体離脱のような状態で召喚してしまったこと。

その異常を感じ取った神獣がレオを助けようと思い、こちらへ魔法で転移させてくれたようだ。

だが、そのままではいずれレオという存在は消滅してしまう。それを回避するための方法は三段階ある。

- 1．神獣と契約をし、レオと魂の一部を繋げる。
 - 2．レオの情報を繋がった魂の情報から肉体を探し召喚する。
 - 3．転移した肉体をレオの魂へと再構築させる。
- ということだ。

「この世界の人間が引き起こしたことなのでな。無条件で助けたいとは思うが…一つだけ願いを聞いてくれまいか？」

「あ、うん。それはいいんだけど…俺にできることなのか？」

「お主なら問題なからう。」

「なら、恩人に対して断る理由はないよ。」

「そうか。ありがたい。では始めるとするか。目を閉じて楽にしててくれ。すぐ終わる。」

立ち上がり目を閉じると、温もりに包まれているような不思議な気分になり、神獣の存在を先ほどまでよりも強く感じられるようになった。

そのまま1分ほど待っているとなんだか間延びした声がかげられた。

『もつ目を開けてもいいよー』

「もついいのか？」

と、目を開けると目の前には真っ白なちんまい生き物がいた。

(あれ？さつきの神獣はどこ?)

と思い、きよろきよろと周囲を探していると

『レオー？何を探してるのー？』

「まさか…さつきの神獣？」

『うん、そーだよー？あ、そういえば説明してなかったねー！契約すると契約者と成長していくために存在が変化するんだよー。それに、体を再構築するために僕の肉体の一部を受肉させたからねー。だからちよつとだけ縮んじやったー！アハハハ』

これのどこがちよつとなのだろうか。レオの目の前には先ほどとは比べることがおこがましいくらいに小さい生き物。

サイズは両の手のひらに乗せられるほどにだ。

『ところで気分はどうーおー？僕がやったんだから問題ないはずなんだけどねー！』

翼をパタパタと動かしながら目の前までやってくる。

「ああ、それは大丈夫みたいだ。改めて言うよ。ありがとう！」

『どういたしましてー！ところで約束覚えてるよねー？』

「もちろんだ。何をすればいいんだ？」

『それを説明する前に…色々と準備しないとねー。服とかー？』
言われて視線を下げるとそこは…

ぱっおーん！(象の鳴き声を脳内再生してください。)

慌てて手で股間を隠し慌てた。

「全裸のままだったのか！？体を転移したときに一緒に服ももって

きてくれたらよかったのに……」
レオは盛大に頂垂れたのだった。

3 契約（後書き）

いかがでしたでしょうか？

おかしな部分、わからない部分あればご指摘下さい。

よかった部分。悪かった部分の感想などいただければ幸いです。

4 脱・全裸！

レオの復活は意外に早かった。

「でもまあ、無いものは無い！仕方ないよな。」

『そーそー！それに、これから準備するんだからー！』

「でも、このあたり何も無いぞ？どうするんだ？」

『まずは僕の住処に移動しよっかー。そこでこれからについてとか色々説明するからさー！れっつごー！』

神獣も「れっつごー」なんて言うんだな。とか思いながらレオは大人しく着いて行く。

着いて行った先に現れたのは大きな洞窟だった。

あの大きな神獣が住処としていたのだから、当然の大きさなのだろう。

そのまま入っていくと、行き止まりまできた。

抜けた羽毛が大量にあり、それが絨毯の役目をしているのだろう、フワフワしていて気持ちよさそうだった。

『じゃーねー。まず何を説明しようかなー？あ、その前に僕に名前をつけてくれるー？』

「そういえば名前がないって言ってたな。別にかまわないんだけど、普通契約する前に名前付けるもんじゃないのか？あと、俺が付けてしまってもいいのか？」

『契約すると、存在が変化するからねー。契約前に名前付けられて

もあまり意味がないんだよー…もちろん契約者はレオなんだから、レオが付けることに意味があるんだよー！だからよろしくねー！」
「わかったようなわからないような。まあお前がそういうんだからな、それについてはあまり考えなくてもいいか。そうだなあ…おかしなことになったけど、俺はお前に出会えて助けて貰えて感謝している。そんな縁を大切にすると意味で、縁えにしってのはどうだ？」
『ありがとー！僕は今からエニシ、よろしくねー！』
「ああ、よろしくな。縁」
『じゃー説明していこうかなー？つと、服がないのも辛いよねー？説明も兼ねて服作ろうかー？』
という縁の言葉に「？」しか浮かばないレオ。
(作るって、材料も何もなくて？)

わけがわからないといった顔のレオに縁は言葉を続ける。

『まー訳がわからないだろうけど、言う通りにしてみてねー？』

「ああ、わかった。まず何をすればいいんだ？」

『まず、さつき体を再構築したときに何か感じたー？』

「？…そうだな、なんか体全体が温もりに包まれたような感じがしたかな。」

『それが魔力なんだよー！』

「いきなり魔力って言われてもな…魔力って、あれか？不思議な力とか、そんなのか？」

服を作る話だったのに、なんで魔力の話になってんだ？と疑問顔のレオ。

『まーまー。言ったでしょー？説明も兼ねて服作ろうってさー！』
確かに言ったな。と思い、レオは大人しく聞いていくことにした。

その内容は、この世界には神獣といった精霊から成長し、肉体を得た縁のような生物が存在している。

神獣の肉体の残滓が熟成されたものが、人間の世界にとって「ミスリル」や「オリハルコン」といった魔力に反応する鉱物になり、特殊な鉱物として取り扱われているという。

人間の世界に知られていないものの、実はその肉体の残滓というのは、「排泄物」なのだそうだ。

（つまり、熟成された排泄物＝化石か？が「ミスリル」や「オリハルコン」なのか。）

ミスリルとオリハルコンの差は、体内魔力濃度によって決まるとい
う。

魔力濃度の低い神獣 ミスリル。 高い神獣 オリハルコンとなるらしい。

ミスリルやオリハルコンという魔力鉱物は、魔力を通しながら精製しなければならぬ鉱物であり。

また、そうして精製された金属は、魔術師にとつてとても有用な装備になるという。

では、排泄物の化石から、そのような貴重な金属が生まれるということ
は？

目の前にある抜け落ちた羽毛はどうなるのか？

『あー！なんか気づいたみたいだねー？たぶんレオの思っている通りだと思っ
よう？だからね、レオの魔力を使ってここに沢山ある羽を使って服を作るん
だよー！』

（まじか…なんかすっげー貴重な服作ろうとしてないか…）

「あ、でも、精製すると金属になるんだろ？」

どうやら化石化すると、その場所にある金属などの不純物も含まれていき、
魔力純度が変化し金属としてしか加工できなくなるらしい。ただ、まだ化石化
してすらいな目目の前にある羽毛を使えば、金

属が含まれていないため金属には変化しないが、比較的自由に加工ができるようだ。

『じゃーさっそくやってみよー！さっき感じた魔力が自分の中にもあるってわかるかなー？』

「おっけー！んー…うーん…あー…えー…あつ！これか？」

『それじゃーねー、まずどれでもいいから羽を一枚持って、加工したい形をしっかりとイメージしながら魔力を込めてみてー？』

「ってか、魔力込めるってどうしたらいいんだ？」

『だいじょぶだいじょぶー！失敗してもいいんだから、思う通りにやってみよー！』

なんか、契約してからかなりアバウトな性格になってしまったような縁。

確かにやってみないとわかんないこともあるな。と思い、羽を持ってイメージを固め、魔力と思われるものを羽に流れるよう力を込める。

すると、手に持っていた羽が輝きだし、変化がおきた。

「お？おー？できた？」

『すごいねー！すごいよレオー！一回でできると思わなかったよー！アハハハハー！！』

おいこらまで。と思わずつつこみたくなつたが、早く服を着たかったレオは手の中の服を確かめる。

そこにあつたのは、シルクのような手触りの真っ白なトランクスが5枚。

この世界において最も高価で最も防御力の高いトランクスが誕生した瞬間だった。

それを早速いそいそと履きだす。

「やっとな裸から抜け出せた！おー、かなり履き心地がいい！」

『あ、そーそー！今、レオは最初に説明した通りに加工したい形だけをイメージしたよねー？形だけじゃなくてー、こういう性質！っていうのも付与できるから、慣れてきたらそういうのも試してみてねー？』

「まじか！？便利すぎるな、この羽…じゃあ早速色々試してみようか！！！」

新たに羽を1枚手にとり、「形・色・性質」をしっかりとイメージしながら魔力を込める！

手に持った羽が光輝き、新たに生まれたのは黒いハイソックスが10足。

「白い羽から黒い靴下が出来上がるってのも不思議だなあ…」
と手に持った靴下を見つめるレオ。

（トランクスは5枚だった。靴下は10足…てことは…まあ、試してみるか？案ずるより産むがやすしっていうしな。）

そう思ったレオは、次に羽を3枚手にとってイメージを固め、魔力を込める。

手にしたのは1枚のえんじ色のTシャツ。

「なるほどねえ。」
素材の質が均一だとしても、量によって出来るものは変わる。ということだ。

その後も生み出し続け、更に茶色のカーゴパンツを細くしたもののフードのついた白いロングコートを作りだし着用した。

けっこうな枚数の羽を消費したからか、下のほうに地面とは違うが銀色の固い素材が見えていた。

「なあ、縁。これはなに？」

『それは鱗だよー。』

「鱗って何の？」

『僕のだよー？』

聞くにどうやら、白い羽毛で覆われた体の下は、銀色の鱗で覆われているようだった。

「じゃあ、これも同じように使えるのか？」

『使えるよー？ただ、鱗は武器としての性質に向いてると思うなー。』

その言葉に、なるほど言われてみればそうかもなと思う。

とりあえず鱗を一枚、羽を2枚使って黒をベースに銀の金属っぽいプレートで覆われた膝下までの長さのブーツを作り履いた。

「よし！これで終わり！」

『おつかれさまー！とりあえずさ、色々あったし疲れたでしょー？今日はここまでにして寝るー？』

「言われてみれば、確かに疲れてるなあ…お言葉に甘えて寝るかな。」

『そーしよーそーしよー！』

縁の誘いをありがたく受け取り、羽を寄せ集め寝床を作る。

『レオおやすみー。また明日ねー』

「ああ、おやすみ。」

そう縁に言い、羽の上に横たわる。

そのレオのおなかの上に縁が乗っかり、二人は眠りについた。

こうして異世界一日目は幕を閉じた。

4 脱・全裸！（後書き）

いかがでしたでしょうか？

おかしな部分、わからない部分あればご指摘下さい。

よかった部分。悪かった部分の感想などいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4847ba/>

優しい世界の救い方（テスト作）

2012年1月14日14時48分発行